

群、来

第70号 平成25年12月24日発行

編集・発行 秋田県水産振興センター

〒010-0531

秋田県男鹿市船川港台島字鶴ノ崎8-4

TEL 0185-27-3003 FAX 0185-27-3004

この1年の動きの中で



国際協力機構研修受入 (H25.11.7)

秋田県水産振興センター
所長 中村 彰男

先ず、平成25年10月21日に、「森に木を植える漁師」となって25年、今や多くの国民が知ることとなった言葉「森は海の恋人」の著者畠山重篤氏の講演を聞く機会がありました。畠山氏は、宮城県気仙沼市の唐桑半島の付け根にある舞根湾でカキ養殖業を営む漁師です。カキは植物プランクトンを餌にする二枚貝ですが、植物プランクトンは、栄養塩の豊富な淡水があつてこそ太陽の光を得て

発生します。本県の岩ガキの主産地にかほ市の海底には、鳥海山の伏流水が湧きだしており、それが岩ガキを育てる源であることはご承知のことです。この「鳥海山にブナを植える会」が活動を始めて20年位になると思いますが、この他に白神山地や鹿角市、そして男鹿市で、広葉樹の苗木を植える活動がさまざまな団体を中心に、一般県民や漁業者が参加して行われており、私は2箇所で植樹に参加する機会がありました。これらの活動は、畠山重篤氏らの活動が手本になり、本県に根付いたものと受け止めています。

樹木と魚類の関係で間違いなく言えることは、保安林の中には「魚付林」という分類があり、「緑濃くして魚影多し」のごとく、水面に陰をつくる林がそこに魚を生息させるといいます。昔々、現在のように松枯れになる以前、男鹿半島は北磯の黒松の海岸に並ぶ松林は、「魚付の松」と呼ぶと聞いたことがあります。松枯れによって、秋田県の海岸に広がっていた防風林・防雪林が消え失せ、今多くの人々、企業によって黒松の苗が植えられ再生されつつありますが、沿岸の岩礁地帯にかつて繁茂した海藻が減少し、石灰質の層が覆う磯焼け現象が起こるのは、ウニなどの植食生物の食圧、海に流れる淡水の栄養塩の減少など様々な要因が考えられています。海に流れ出る淡水の質を大切にすることが、漁業生産にどれほど大切なことかを、環境が変わった後に知ったことが、これまであまりにも多かったのではないのでしょうか。「秋田県ふるさとの森と川と海の保全及び創造に関する条例」に沿って、「秋田県水と緑の森づくり税」を財源とする事業を活用し、今、漁業関係者がもっと林業関係者と連携を図り、雄勝漁業協同組合のように広葉樹の苗木を山に植える活動を展開し、恵み多い自然環境づくりに取り組むべき時期に来ていると考えます。

次に、平成25年11月7日、JICA（国際協力機構）集団研修「沿岸漁業管理コース」の西アフリカ諸国を中心とする研修員11名が、マリノフォーラム21を介して当センターを訪れました。平成25年1月に新たに作成した当センターのパンフレットは、国際化を視野に入れ、苦労しながら主な項目を英語併記にしており、そのことがやっと日の目を見た思いでした。そして、職員によるハタハタに関する調査や水産業改良普及事業の講義、栽培漁業施設や漁業調査指導船千秋丸の見学案内を通して、わずかではありますが国際協力ができ、感謝されたことが記憶に残るうれしい出来事でした。

●トピックス (資源部) ●

男鹿海洋高校生による千秋丸乗船実習



漁業調査指導船「千秋丸」

漁業調査指導船「千秋丸」による男鹿海洋高校生を対象とした乗船実習が行われました。乗船実習は1～3年生を対象とした体験乗船、2、3年生を対象としたハタハタ資源調査及び底びき網調査で、4月17日から7月5日までに22回実施し、延べ187名の生徒が乗船しました。

4、5月に行った体験乗船では千秋丸が船川港を出港すると間もなく、船酔いのためダウンする生徒が続出し心配しましたが、徐々に慣れ、6～7月の底びき網調査では、漁獲したマダラやアカエビなどの選別や測定を元

気に行えるようになりました。体験乗船を通じて、海や漁業の魅力を感じて貰えたと思います。また、9月には2名の生徒が2回、インターンシップで底びき網調査に乗船しています。

今後も、乗船実習を通じて漁業を目指す若者の育成に協力をしていきたいと考えています。漁業者グループの乗船研修もできますので、ご相談ください。



ブリッジ上からの見学



底びき網作業前の打合せ



底びき網漁獲物の選別作業

●トピックス (総務企画室) ●

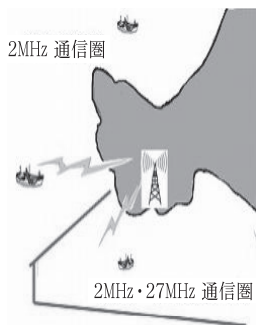
船舶の無線スイッチ ON 漁業無線局を利用しましょう

漁業無線局では海上における漁業者の人命、財産の保全及び航海の安全をサポートし、漁業振興に寄与します。最新の気象情報はもとより、操業の安全、海難事故の未然防止に関する通報を速やかに伝達しています。

各灯台の気象なども無線局で簡単に調べる事ができますので、気軽に男鹿漁業、船川漁業を呼び出してください。

また、GMDSS 制度が平成11年2月1日から全世界で完全実施されています。

A2海域(150海里内)の、みなしGM局は、1日3回以上の動静連絡が義務化されていますので、該当する船舶局は定時連絡をお願いします。

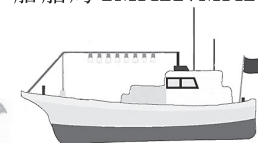


無線局 2MHz27MHz



↑ 県・各省庁との情報連絡 ↓

船舶局 2MHz27MHz



漁船の安全
のために

緊急通信連絡
工事訓練等の安全情報
気象海象情報全般
調査船水温観測情報



●研究成果報告(増殖部)●

イワガキ漁場再生の取組み

イワガキは全国でもトップクラスの漁獲量を誇る本県の特産品ですが、成長が遅く、一度漁獲すると再付着しにくい場合もあり、県南部沿岸を中心に資源の減少が危惧されています。

これまでの研究で、イワガキの再生産を阻害する原因として、採った後の岩に海藻やフジツボなどが付いて稚貝が付くのを妨げたり、稚貝のうちに小型巻貝のレイシに食べられてしまうことなどが考えられています。

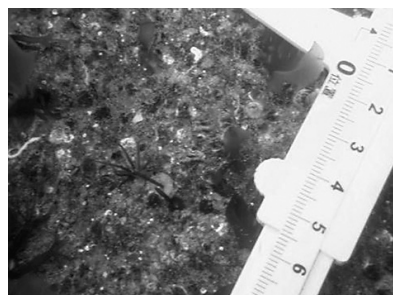
これらを基に、平成24年度からにかほ市金浦及び象潟地区で、イワガキ礁ブロックの付着物除去とレイシなどの害敵生物の駆除を行いました。付着物除去は、潜水士がフーカー潜水により、ケレン棒などを用いて行いました。

また、潟上市天王地区では、漁業者グループがスキューバ潜水により、試験的に天然石の付着物除去を行ったところ、イワガキ稚貝の付着が確認され、平成25年度からは本格的に付着物除去と害敵生物駆除に取り組んでいます。

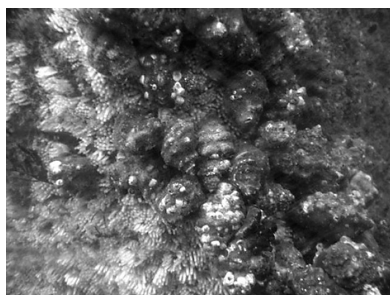
今後は、漁業者グループの取組みを支援していくとともに、さらに効率的な付着物除去及び害敵駆除の方法を検討することとしています。



付着物除去作業の様子
(上から金浦、象潟、天王)



付着したイワガキ稚貝(天王、6月)



レイシの蛸集と産卵

●研究成果報告(内水面試験池)●

サクラマスの放流技術確立を目指して (幼稚魚放流の現状と課題について)

サクラマスは漁業のみならず遊漁にとっても重要な魚種です。この資源の安定や増大を図るために、県内の漁協等が主体となり幼稚魚の放流が行われています。内水面試験池では、継代種苗の生産やその回帰状況の把握とともに、天然親魚からの継代数の違いや採捕水系の違いによる、成長や生残の比較などサクラマスの増殖に関する試験を実施しています。

この試験の中で毎年度、採卵翌年6月と翌々年の3月の計2回にわたる標識放流を実施しています。それぞれの標識放流尾数は平成23年度12.0千尾、5.5千尾、平成24年度10.0千尾、7.0千尾で、平成25年度は8.0千尾、6.0千尾を予定しており、同時に種苗生産試験で発生する水槽が過密になる種苗の間引き放流も行っています。

標識放流魚の追跡調査では、サクラマスは採卵翌々年の4月に降海し、一年間、日本海やオホーツク海、津軽海峡等で魚類やプランクトンを食べながら過ごし、その後河川に回帰する頃には体重2～3kgに成長することなどが明らかになりました。

種苗生産については安定的な生産技術が確立しつつありますが、近年飼料が高騰していることから、最小限の尾数を飼育することが求められています。放流後の幼稚魚の減耗要因が把握できていないなど多くの課題があり、これらを解決することで、試験池だけでなく県内各地で放流された人工種苗が、河川や海で生き残り、サクラマス資源を支えてくれることを願っています。

●研究成果報告(資源部)●

今期の大型クラゲ来遊状況

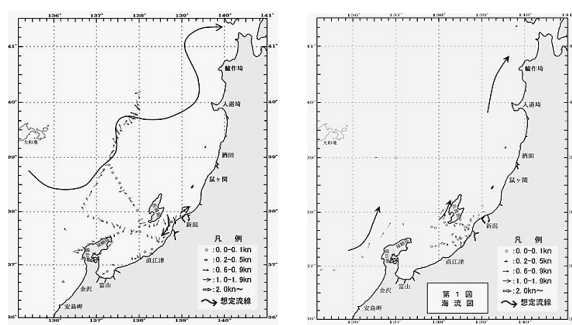
秋田県では、定置網及び底びき網漁業者の方々の協力を得て、エチゼンクラゲ（大型クラゲ）の出現状況について調査をしています。今季の出現数は、大発生した平成21年度ほどではないものの、昨年に比べ大幅に増え、11月末時点で確認された累計出現数はおおよそ2,900個体に達しました。今期の本県における大型クラゲの出現数は、全国の中でも特に多くなっております。

なぜ、今期は本県において、これほど大型クラゲが出現しているのでしょうか。それは、対馬暖流主流の、蛇行のあり方にあると考えられます。今期の対馬暖流の主流は、能登半島沖から佐渡島周辺にかけて沖合に向かった後、例年どおりそのまま北上することなく、本県沿岸に向かって接岸するというパターンを、長期に渡って示しています。このため、対馬暖流に乗って来遊する大型クラゲも、本県沿岸へまとまって来遊したものと考えられます。

当センターでは来年以降も被害軽減に向け来遊状況を把握し、注意情報を発信していきます。



海中を漂う大型クラゲ



9月下旬における
対馬暖流主流の流路

(左：平成25年度、
右：平成21年度)

●普及活動報告(総務企画室)●

女性部「戸賀浜のかあちゃん」の活動について

男鹿市戸賀地区には、男鹿水族館「GAO」や男鹿温泉郷があり、観光・レジャースポットとなっています。しかし、過疎や高齢化、魚価安により地区には停滞感が漂っていました。そこで、漁協女性部の5人が平成21年2月に「戸賀浜のかあちゃん」を組織し、浜の元気につながるように、地元で水揚げされる漁獲物の加工・販売を開始しました。

平成23年度から県の「秋田の地魚加工商品開発・販売推進事業」により加工機器を導入し、新商品の試作品開発を行い、学校給食への納入や各種イベントで販売をしました。

次に加工場の名称を「網元番屋」とし、期間限定の飲食店営業をしました。本年度は網元番屋を主体に土・日曜日の定期営業を開始し、時期別に旬の地魚を添えるかあちゃん定食、エゴそば定食、番屋カレー、サケ・イクラ丼定食などを提供しています。なお、土・日曜日以外にも家族、小グループの予約受付を行っています。

これまでに開発したサケかまぼこスモーク、アジのひょっこり揚げ、サケ中骨くん、エゴ草、とろとろワカメ、茎ワカメなどを、期間限定で販売しています。



戸賀浜のかあちゃん



かあちゃん定食

編集後記

参観デーなどで魚に触れる水槽を見ていると多くの子供達がやってきて、最初は怖がっていた子もすぐに慣れて楽しんでいます。この体験をとおして魚に興味を持ってもらえたら幸いです。
(担当：総務企画班)